

# オンラインシステムを活用した科目「職業指導Ⅱ」における教員養成

## Teacher training in “vocational guidance II” utilizing the online system.

高岩 千尋\*

### 要 旨

高等学校教員免許「工業」の取得に必要な専門科目「職業指導Ⅱ」の指導について、新型コロナウイルス感染症流行時における質の高い学びの保証やToyoNet-ACE・Cisco Webex Meetingsといったオンラインツールを活用した学びの維持とこれからの時代の新しい教育を担う教員の養成について、2020年度秋学期の指導をもとに考察する。

キーワード：職業指導、オンライン授業、教員養成

#### 1. はじめに

私は、工業高校の教員を本業とする傍ら、大学において高等学校教員免許取得に関する科目を非常勤で担当しており、東洋大学（以下、本学）においては、2020年度より「職業指導Ⅱ」を川越キャンパス（理工学部）並びに朝霞キャンパス（ライフデザイン学部）にて担当している。

本稿では、新型コロナウイルス流行時における教職科目の運営および教職を目指す学生の育成について考察する。

#### 2. 科目「職業指導」と「職業指導Ⅱ」の概要

##### 2.1 本学の開講状況と指導上の配慮

本学では、職業指導4単位を職業指導Ⅰ（2単位）と職業指導Ⅱ（2単位）に分けて開講しており、履修については、職業指導Ⅰ・Ⅱの順に履修するように指導を行っている。

今回の履修者は、昨年度もしくは今年度に職業指導Ⅰを履修しているが、職業指導Ⅰも2020年度より担当者が交代しており、既習事項の違いについても考慮して職業指導Ⅰと多少内容が重なるが、基礎的な事項から扱っていくこととした。

##### 2.2 教員免許「工業」における措置と対応

教育職員免許法施行規則第5条表備考6において、「工業の普通免許状の授与を受ける場合は、当分の間、各教科の指導法に関する科目及び教諭の教育の基礎的理解に関する科目等の全部又は一部の単位は、当該免許状に係る教科に関する専門的事項に関する科目について修得することができる」と定められている。

本学では、工業の教科に関する指導法の科目（工業科教育法）を開講していないため、工業の免許を取得する学生が必ず履修する職業指導において、工業高校全般に関する内容や教師の仕事等も扱うようにした。

##### 2.3 2020年度、職業指導Ⅱの開講状況

科目名： 職業指導Ⅱ（2単位・秋学期）

履修者： 川越キャンパス6名、朝霞キャンパス2名  
男子学生3名、女子学生5名

3学年学生7名、2学年学生1名

普通高校出身者4名、工業高校出身者4名

時間割： 川越キャンパス 水曜日1限（9:00～）

朝霞キャンパス 木曜日2限（10:40～）

授業形態：川越キャンパス 対面（1302教室）・

オンラインから学生が選択

朝霞キャンパス オンラインのみ

\*理工学部機械工学科

## 2.4 講義の目的および内容

職業指導Ⅱでは、青年の職業的自立と高等学校における職業指導について、職業教育や職業訓練の具体例や我が国の社会的・歴史的背景について理解を深め、教員として実践的な職業指導を指導できるようになることを目指す内容とした。

## 2.5 学修到達目標

職業指導Ⅱについて、以下のように学修到達目標を定めることとした。

- ・高等学校における進路指導やキャリア教育の意義・原理と背景や位置づけを理解し説明できる。
- ・工業高校における職業指導の考えと指導の在り方、意義と留意点について理解し記述できる。
- ・さまざまな課題を持つ生徒に対する指導の考え方を理解し、自分のキャリアを生かした職業指導を実施できる。

## 2.6 講義スケジュール

第1回	ガイダンス・高等学校について
第2回	職業教育とキャリア教育の違い、現代における職業指導の役割と課題、めざすべき職業指導の視点
第3回	高校生の進路実態と時代背景、雇用形態の区分、ワーキングプア、格差社会、非正規労働者
第4回	高校生の進学ルート、北海道地方の進路状況、定時制高校の進路
第5回	職場で働く青年の実際（インタビューをもとに）
第6回	職業指導と就職指導システム、一人一社制について、統一応募用紙（履歴書）・調査書の書きかた
第7回	職業指導と職業教育、普通科高校・職業学科高校・総合学科高校における指導
第8回	高校職業指導実践をめぐる諸問題（インターンシップ・デュアルシステム）、公的職業資格と技能検定指導の成果と問題
第9回	労働の世界にかかわる人権教育としての職業指導、国際労働機関（ILO）の条約と日本による批准

第10回	ハンディのある青年の進路の保障、海外（デンマーク・ドイツ）における職業訓練、障がい者雇用の制度と現状（法定雇用率制度など）
第11回	学校の役割・教師の役割、新規学卒一括採用・終身雇用・年功型賃金制度の変化とともに
第12回	高等教育の修学支援新制度について、学校における労働者（継続雇用、非常勤講師、業務委託など）、教師の雇用と労働条件について考える
第13回	COVID-19による工業高校の就職状況の変化、高校におけるオンライン授業について
第14回	これまでの学習内容を振り返る。試験
第15回	模擬授業、授業のまとめ

## 2.7 使用テキスト

授業において、以下のテキストを第2回目以降使用することとして履修者に指定した。

齊藤武雄・佐々木英一・田中喜美・依田有弘 編著『ノンキャリア教育としての職業指導』（学文社、2009年、ISBN:9784762019241）定価:本体2,500円+税

## 2.8 成績評価の方法・基準

以下の方法および割合で、単位認定及び成績評価を行うこととした。

1. 試験（30%）
2. 予習課題・授業レポート・ペアワーク（60%）
3. 模擬授業（10%）

## 3. 職業指導Ⅱの授業実施状況

### 3.1 授業形態の決定

2020年度秋学期は、新型コロナウイルス感染症の流行が継続しており、感染症対策を徹底した上で、対面授業の限定的な導入を行うこととなった。

川越キャンパスにおいては、教員免許取得に関する科目であることや履修者数が例年10名弱であることから、教室の確保やキャンパス全体の収容人数の検討をいただき、希望者には対面授業を行うこととした。

朝霞キャンパスについては、講義科目はオンデマンド

方式のオンライン授業を原則とする方針があったため、オンラインのみの対応とした。

また、学生の学修リズムの確保やフィードバック等の学修効果の維持・向上を目的にペアワークを授業時間帯にオンラインで設定し、希望する学生にリアルタイムでの対応ができるように配慮した。

### 3.2 オンライン環境の把握と配慮

オンライン授業において、履修者の受講環境がどうなっているか初めに状況の把握を行うこととした。

第1回目の授業時にToyoNet-ACEのアンケート機能を使用して、受講場所、通信環境、画面サイズの3つについて調査を実施した。

受講場所については、全員が自宅での受講としており、前後の科目や通信環境の事情で通学する履修者はいないようであった。

通信環境については、3分の1程度の履修者が通信容量に制限があるとのことで、通信容量に配慮して動画の時間を1コマ当たり60分程度に抑えることや講義スライドをPDFの配布資料にしたものとMP3（音声）ファイルで受講することもできるようにした。

画面サイズについては、3分の1が15インチ以上のこの科目においては十分なサイズ、3分の1が10～14インチのそれほど問題とならないサイズであったが、残りの3分の1が10インチ未満のタブレットやスマートフォンを使用しているということで、スライドを作成する上でも配慮を行うこととした。

### 3.3 講義の流れ

各回の講義は、以下のように行った。

授業前 (予習)	①指定されたテキストのページを読む ②予習確認テスト解答 (ToyoNet-ACE) ③講義資料の印刷
講義	①前回のフォロー動画視聴 (5～10分) ②ワークシート作業 ③講義動画視聴 (約60分)

ペアワーク	指定されたテーマについて、ペアを見つけて話し合い・意見交換を行う
レポート	毎回、A4×4枚程度のレポートを提出 (授業日より1週間後が期限)

### 3.4 授業前の予習および準備

授業に際して、以下の3つを履修者に指示した。

1つ目がシラバスに指定したテキストのページを読んでもおくこと。2つ目がテキストを読み終えたあとにToyoNet-ACEにある確認小テスト（正誤式2問と択一式3問の合計5問）を行うこと。3つ目がオンライン受講者は、講義に使用する資料（職業指導だよりA4×4ページ）とワークシート・レポートを印刷することである。

### 3.5 講義の受講

講義は、配布資料の内容やイラスト・グラフ等を貼り付けたスライドを使用し、対面ではこれを使用して講義を行い、オンライン受講者には同じ内容を別途、収録した動画を視聴させる形式を採ることとした。

これは、私自身が対面の授業をしながら撮影をするオンデマンド方式に授業の質の不安を感じたことと、本業との関係で授業動画の作成やUPが週末でないと難しいことを考慮した。

そのため、土日にオンデマンドの動画を収録し、水曜日に同じ内容の対面授業を行うようにした。しかし、授業時間が1限で朝早いことや通勤ラッシュ時間帯に通学する必要があるため、希望する学生がいなく、対面による講義を行う機会がなかった。

### 3.6 川越キャンパスにおける対面指導

川越キャンパスの履修者にアンケートを実施し、受講方法を選択させたところ、多くの学生は非対面を希望した。しかし、対面の指導を考えている学生がいたため、毎回、キャンパスにて対応できるように待機することとした。

第2回目にその学生が通学してきたため、responを

使用した出席登録や大学が行うQRコードによる行動記録の指示、女子学生であったため、人の少ない状況における安全確保についても指導を行った。

また、第14回目には模擬授業の撮影に通学する学生がおり、実際ほとんど出番がなかったが、対面指導を選択できることの意義はあったと考えられる。

教室は、100名以上が収容できる大きな部屋であったこと、部屋の四隅の扉や窓を開けて十分な換気ができたこと、消毒液の配備がされていたこと、1限のため開始時に学生の入替えがないことなど、新型コロナウイルス感染症に対して好条件が整っていた。

### 3.7 オンラインによる授業動画の配信

オンライン授業は、オンデマンド方式による動画視聴とし、動画はMicrosoft PowerPointで作成したスライドに音声を収録したものをMP4形式で保存し、YouTubeに限定公開をした上でToyoNet-ACEのコースコンテンツより履修者に提示することとした。

本学のGoogleアカウントでは、YouTubeの動画配信ができないため、個人アカウントを作成して対応することとした。また、標準では15分を超えた動画が使用できないため、上限の引き上げ作業を行った。

動画配信を行うには、YouTubeのほかにGoogleドライブを使用する方法等もあるが、YouTubeの場合、視聴側でデータ容量や画質を設定できることや送信側で通信状況を考慮して自動的に画質を調整してくれることが良いと考えた。また、YouTubeは使用経験のある学生が多く予想され、操作が容易であることや一部には通信容量がカウントフリーとなる契約をしている場合もあると考えた。

動画については、学生の集中時間を考慮し、1つの動画時間を10～15分と細かく区切ることとした。

しかし、一部の学生から講義1回分（10～15分の動画を3もしくは4つ）をまとめた動画を希望する声が上がったため、フリーソフト（unitemovie）を使用したまとめ動画も併せて配信することとした。

また、通信容量に不安のある学生に対応するため、フリーソフト（EcoDecoTool）を使用してMP4形式の動画からMP3形式の音声を抽出したものを配信し、PDF形式で配布するスライド資料と音声で受講できるようにもした。

今回の講義においては、MP3による受講者がいた場合を考慮し、スライドの右下に大きくスライド番号を入れることと、説明時にスライド番号を読み上げる配慮を行った。

また、文字フォントをUD（ユニバーサルデザイン）フォントとすることや自己所有の4.7インチスマートフォンでモニターし、文字サイズを原則40ポイント以上とするなど視聴側への配慮を行った。

1回分の講義をまとめた動画を作る際、Microsoft PowerPointのスライドを貼り合わせてから、MP4の動画を出力することも可能であるが、スライドを貼り合わせるとページ番号が変わってしまい、音声とスライドの表示がずれてしまうことに注意が必要である。

また、ToyoNet-ACEには大容量のファイルを添付できないため、動画（MP4）についてはYouTubeのURLのリンクを貼り付けるようにした。

### 3.8 前回の学習内容のフォロー

オンデマンド方式によるオンライン授業では、タイムラグが指導上の問題となる。

今回の場合、授業日が水曜日もしくは木曜日、授業動画はその前の日曜日にUPしている。レポートは授業日から1週間後を提出期限としているため、早くレポート提出した学生の反応を見て、フォロー動画を授業日前の月曜もしくは火曜日にUPするようにしたが、もう少し改善が必要であると感じた。

### 3.9 ワークシート作業

授業時、ただ動画を視聴するだけでなく、学生が主体的に取り組むよう作業を取り入れるようにした。

対面であれば、教師が問いを投げかけ、学生の反応を

見ながら話しを進めることが可能であるが、オンラインの際には、①作業をしてから動画の視聴、②1つ目の動画を視聴してから作業。その後、2つ目以降の動画を視聴、③動画視聴後にレポートとともに提出させ、次の動画にて解説するなどの方法を組み合わせることとした。

### 3. 10 ペアワーク

職業指導において、他人の考えや生き方に触れることは大きな意味を持っている。また、オンライン生活が続き、他の学生との交流が減っている状況も考慮し、第1回～第13回の授業において毎回ペアワークを実施した。

ペアワークは、時間割の配当時間（川越キャンパス10:00～、朝霞キャンパス11:00～）に設定した対面やオンラインによるものと各自のタイミングでペアを見つけて行うものとどちらかを選択する方式とした。

私としては、できればこの科目を履修する学生同士でペアを交代しながら実施をしたいと考え、対面もしくはCisco Webex Teamsにて行うことを検討した。

また、秋学期開始時にCisco Webex Meetingsがブレイクアウトに対応することになったため、オンラインについてはこちらに絞って準備を行った。

しかし、比較的早い時間帯であること、大学への移動時間に重なってしまうこと、知らない学生との会話に遠慮をしてしまうことなど、各自がペアを見つけて実施する方が中心となってしまった。

川越キャンパスについては、第2回目に通学してきた学生が毎回オンラインで参加したのと、他に1回のみオンラインで参加した学生が1名いた。

ペアワークに併せて、授業内容に関する質問等の対応をするだけでなく、学生自身の進路について相談に乗るなどのフォローも行った。

朝霞キャンパスについては、履修者2名がすでに面識があり、2人が設定した時間に毎回オンラインにてペアワークを実施した。

オンラインにおいては、こちらは毎回顔出しをして参加をするが、履修者には家庭環境や通信容量等に配慮し

顔出しを求めないようにした。

### 3. 11 レポート

レポートは、試験を行う第14回目を除いて毎回設定し、履修者の学習状況を確認することとした。

レポートは、担当者がWord形式（docx）で作成したファイルをダウンロードして直接入力したものをToyoNet-ACE経由で提出。もしくは、担当者がPDF形式で配布したファイルを印刷し、手書きで記入した後、スキャナやスマートフォンのカメラで撮影し、jpgもしくはPDF形式でToyoNet-ACE経由で提出するいずれかの方法を学生が選択できるようにした。

提出後は、メチから1週間を目処に担当者が印刷し、細かくコメントを記入した上でToyoNet-ACEの個別指導よりフィードバックすることとした。

1つのレポートにコメントをつけるのに、20～30分かかる状況であったが、学習を細かくサポートすること、教師の授業づくりへのこだわりを履修者に感じてもらいたく、手間のかかる指導法を選んだ。

### 3. 12 学期末試験

学期末の試験については、川越キャンパスについては、対面もしくはオンラインからの選択、朝霞キャンパスについては、オンラインで実施することとした。

学生には、どちらを選んでも有利・不利がないことと、対面試験においても持ち込みを認めるなど、どちらも選択しやすいように設定した。

オンライン試験は、ToyoNet-ACEの小テスト機能を使用し、10分程度の試験を複数設定したり、記述問題を増やしたり、個別に試験問題を設定するなどの工夫を行った。

また、テスト期間を1週間設けることやトラブルに備えてあらかじめ再テストを設定しておくなどの対応を準備しておいた。

### 3. 13 模擬授業

授業開始時に、履修者に対面もしくはオンラインによる模擬授業の実施を予告しておいた。

講義について、非対面での履修者が多いことから、集合による模擬授業は実施せず、オンライン方式によるもので実施することとした。

模擬授業については、①スライドに音声を付加する方法、②ノートや紙を黒板に見立て、スマートフォンを用いて撮影する方法、③教室を使用して授業時間中に撮影する方法の3つの方法とそれぞれの見本動画を提示し、これ以外の方法も含めて学生が自由に選択できるようにした。

動画の提出については、担当者と個々の履修者のみで共有したGoogleドライブのフォルダにMP4形式の動画を提出するか、履修者がYouTubeに動画を限定公開でUPし、URLを提出することとした。

また、朝霞キャンパスの履修者が2名と少ないため、川越・朝霞の2キャンパス合同で実施することとした。

## 4. 講義の指導内容と学生の反応

### 4.1 ガイダンス (第1回)

初回の授業で、アイスブレイクを兼ねて高等学校を様々な観点から3つに分類する方法(設置者別:国立・公立・私立、課程別:全日制・定時制・通信制、学科別:普通科・専門学科・総合学科など)や学校で働く人々、教師の仕事などを扱うこと、自分の将来について考えることを実施した。

自分の将来については、女子学生が多く結婚や出産という私生活のプランをしっかりと持っている学生が多かったこと。また、教職科目の履修者であることから学年主任や教務主任といったキャリアであるとか、建築系の学生が多いため一軒家を持つとする記述が見られた。

### 4.2 時代の変化と日本型雇用 (第2回)

第2回目は、バブル景気の崩壊やその後の構造改革による規制緩和、派遣制度の拡大、リーマンショックとい

った時代背景や新規学卒者の一括採用、年功序列、企業内教育といった日本が諸外国と比較して、独自の形態を持つ雇用システムについて扱った。

また、職業指導を行う上で理想とするキャリアパスを示すのではなく、リアリティのある指導を行う必要性について扱った。

履修者のレポートを見ると保護者が教員をしている学生や学習塾でアルバイトをしている学生など、学生の状況も少しずつ分かり始めてきた。

### 4.3 雇用の形態と男女平等 (第3回)

雇用の形態については、常用雇用・有期雇用といった雇用期間について、直接雇用・間接雇用といった雇用主について、フルタイム・パートタイムといった労働時間について扱った。

また、男女雇用機会均等法により女性の深夜労働が解禁になったことは、男女平等といえるかを考えさせた。女子学生の中から、深夜労働を自由に選べるほうが良いという意見があったが、本人の希望に反して強いられる場合はないだろうかと考えさせた。

### 4.4 大学進学と学生から見たコロナ禍における大学選び (第4回)

高卒者の進路先として、大学や専門学校について扱う中、本学の新型コロナウイルス感染症対策や履修者がこの時代に高校の進路担当だったら大学選びをどう指導するか考えさせた。

履修者からは、本学の対面と非対面を選べることやQRコードを用いた行動履歴記録等の感染症対策について、一定の評価が見られたが、大学施設の利用制限が多いことや施設利用料の負担について疑問に思う学生も一部に見られた。

大学選びについては、卒業生からコロナ禍における大学の授業や学生生活について聞き取りを行うという声や学生のコロナに対する考えを尊重した指導を行うといった声が見られた。

#### 4.5 職業指導と就職指導システム（第6回）

第6回目は、4月からの年間スケジュールや高卒者が就職選考で使用する履歴書の記入体験、身近な知人を推薦する推薦文の練習等を実施した。

履修者が志望する業種への志望動機や知人に対する推薦文のコメント作成、添削活動を通じて、生徒を見ていく視点やどのように担任として業務を進めていくかを感じてもらおうようにした。

また、一人一社制という高卒者独自の採用システムや社用紙の記入等による差別行為についても取り上げ、採用選考にあたっての注意事項の指導を行った。

工業高校出身の履修者からは、自分が高校生の時に同級生が行っていたことがよく分かったとか、自分たちが知らないところで教師がそれだけ動いていることを知ったという声が見られた。

#### 4.6 高校職業指導実践をめぐる諸問題（第8回）

第8回目は、インターンシップやデュアルシステムといった、高校在学中に企業との繋がりで実施される教育について、実施までの準備や実施上の問題点等を扱った。

デュアルシステムについては、高校在学中に企業で専門に関する学習ができることや企業と生徒・保護者の双方が合意すれば採用につながることに魅力を感じる履修者が比較的多くみられた。

しかし、学生が思い浮かべる企業は大企業が中心で、実際の受入先は中小企業が中心であることや資格取得や部活動などへの影響が懸念されることを言うと少し考えも変わったのではないかと思われる。

そのような中、測量士補や土木施工管理技士と言った受験に際して実務経験が必要な資格に対して、デュアルシステムで期間の短縮ができないかと言った学生がいた。実際には難しい問題ではあるが、このような柔軟でかつ真剣な発想する学生がいて、とても感心させられた。

#### 4.7 障がい者雇用の制度と現状（第10回）

第10回目は、障がい者の雇用に関する法定雇用率の

問題や障害者雇用納付金制度など、高校においても障がい者の就職指導を行う場面があり、私の経験等を交えながら講義を行った。

近年、教員免許を取得する際にも特別支援教育に関する単位の修得が必要になるなど、障がい者理解の必要性が高くなっている。

履修者からは、兄弟の中に障がいを持っている人がいると言った話や保護者が仕事で障がい者と関わる仕事をしていると言った声があった。

学校現場においては、障がい（肢体や聴覚）を持つ事務職員や教員、生徒と関わる機会はそれほど特別ではないと感じられる。

雇用情勢が悪化すると、立場が弱い人ほど大きく影響を受ける。教師にはそのような人に寄り添う力も必要である。

#### 4.8 新規学卒一括採用・終身雇用・年功型賃金制度の変化（第11回）

第11回目は、裁量労働制や年俸制といった労働や賃金の制度変化、最低賃金や有給休暇といった働く上でのルールについて取り上げた。

また、労働や賃金の変化の良し悪しだけでなく、人件費が抑制される方向へ社会が動いている現状を説明した。

また、年齢が60歳を超えると非正規雇用の割合が一気に高くなる状況や非正規雇用の男女差を見た場合に女性の非正規雇用の割合が高いことなどを扱った。

履修者からは、女性の非正規雇用者が多いことに驚いたという意見や育児や家事のことを考えて正規は難しいから非正規が“いい”という意見があるのではないかという声があった。

#### 4.9 学校における労働者（第12回）

第12回目は、学校で働く人々と雇用契約など、履修者がイメージを持ちやすい学校を対象として、定年退職後の継続雇用や非常勤講師、業務委託等について扱った。

近年の高校では、働く意欲のある60歳以上の人を対

象とした継続雇用の制度があることや図書館、用務、給食調理等で自治体によっては、民間への業務委託が進んでいる状況を扱った。

また、現職高校教師の大学における能力向上として、以下の7つの方法について説明を行った。

①教職大学院への入学、②大学院修学休業制度、③大学院における長期履修制度、④教育委員会による大学院派遣制度、⑤科目履修生や専修免許取得を目指した集中講座の履修、⑥通信制大学院への入学、⑦教員免許更新講習の受講

その他にもタイムリーな話題として、1年単位の変形労働時間制について、教師の働きすぎの解消や魅力向上につながるかを考えさせた。

履修者からは、教師が常に学ぶ姿勢を持ち続けることは素晴らしく、生徒もそのような先生の姿を学ぶのではないかという声があった。

#### 4. 10 高校におけるオンライン授業 (第13回)

第13回目は、オンライン授業を行うにはどのような準備が必要か。また、オンライン授業ができる高校とできない高校では、どんな違いがあったのか。さらには、新型コロナウイルス感染症による長期間の学校休業が学力の格差を大きくしたこと等を扱った。

また、履修者の中に教職への就職を強く希望しているわけでもない。それでいて、課題への取り組みが不十分に感じられる学生がごく一部に見られた。そこで、教員免許の価値や必要性という問題についても全員に投げかけを行った。

履修者からは、教員免許が不要という声は見られず、教師として最低ライン（基準）として必要とか、生徒の指導に関する知識を身に着けているという証であるという声が見られた。

私からすれば、教職科目を履修している学生に聞いているので当然の回答であると思う。しかし、自分たちでそのような考えを持つなら、単位のスタンプラリーとならないよう、個々がより意識して取り組むよう期待したい。

#### 4. 11 オンラインによる期末試験 (第14回)

第14回目は、アンケート調査により、全員がオンラインによる試験を希望したため、ToyoNet-ACEの小テスト機能を使用した試験を行うこととした。

今回、履修者同士で友人関係等にある場合が、私が把握しているだけで3組あったため、問題が漏洩しないよう履修者分の問題数（8名×6問）を用意することとした。（組み合わせのみ共通問題とした）

履修者は、1月4日～11日の1週間に以下の6種類の問題をWeb上にて受験した。

- ①正誤式（5問・制限時間10分）
- ②択一式（5問・制限時間10分）
- ③組み合わせ（2問・制限時間5分）
- ④記述式（1問・制限時間10分）
- ⑤記述式（1問・制限時間10分）
- ⑥記述式（1問・制限時間15分）

履修者へは、通信環境や受験する部屋の環境が整った場所を用意することとテキスト・プリント・レポートの持ち込み許可をあらかじめ指示しておいた。

試験の受験に際し、あらかじめ講義資料（職業指導だより）と説明動画を視聴したうえで実施するように指示を行ったが、指示がうまく伝わらず誤って他人に指定した問題を解答してしまう例が数件見られた。

この場合、誤って解答した学生には、ToyoNet-ACEの個別指導より注意を行い、正規の解答者には、状況を説明した上で問題の差し替えを行った。

試験問題は、講義の学習内容の確認が中心であり、難易度に差がない問題の作成を行った。

また、試験最終日には、解答がされていない学生にリマインダー通知をToyoNet-ACEより行い、全員が期間中に解答を終えることができた。

今回、パソコンや通信回線のトラブルはなく、再試験は行わなかった。

#### 4. 12 オンラインによる模擬授業 (第15回)

第15回目は、オンラインによる模擬授業を以下の条



件で実施した。

対象：高校生（学科や学年などの対象者は自由）

内容：HR等で行うこの科目の学習内容を生かした授業（テーマは自由）

時間：5分～10分（導入・展開など一部の実施）動画については、以下のような状況であった。

①スライドに音声を付加する方法 6名

②ノートや紙を黒板に見立て、スマートフォンを用いて撮影する方法 1名

③教室を使用して授業時間中に撮影する方法 1名

履修者には、3つの方法について説明をする動画を事前に提示したが、私の講義スタイルがスライドに音声を付加する方法であったため、これが一番多くなったものと考えられる。

模擬授業動画の作成には、③の1名が撮影の支援が必要であったが、それ以外の学生は自分で対応ができていた。

模擬授業動画は、私が設定する提出用のGoogleドライブフォルダへ提出するか、各自がYouTubeに限定公開を行い、URLを提出する方法を選択させた。

履修者は、前者が6名、後者が2名といずれも問題なく対応できていた。なお、1名が音声の入ったパワーポイントファイルの提出をしたため、こちらでMP4に変換した。

模擬授業の動画視聴については、履修者からMP4形式で提出されたものを、担当者がYouTubeに限定公開を行い、提出されたURLとともにToyoNet-ACEのコンテンツより履修者へ提示した。

また、模擬授業のコメントについては、ToyoNet-ACEの小テスト機能を使い、良かった点とここはもう少しこうしたらよいという批判を行わないものに限定して入力するよう指示を行った。

その後、誰からのコメントが分からない状態に編集し、担当者からのコメントを加えて授業者へフィードバックすることとした。

模擬授業のテーマは、以下のようなものであった。

①インターンシップについて

②自分になりたい職業を探そう

③進学か就職かを考える時間におけるお金の話

④自分のやりたい仕事を見つけるための職業についてのレポート作成

⑤インターンシップ後のHRでそれぞれの体験談等をワークショップ形式で意見・情報交換を行う

⑥工業高校建築科に在籍している1,2年生を対象とした進路説明会

⑦労働法について

⑧夏休み前のHRで適性診断テストの返却をし、夏休み期間中に自分の課題を考える

全体的な印象としては、スライドの作成やナレーションなど、手の込んだ良い作品が多く見られた。

## 5. オンライン授業と教員養成

### 5.1 授業の質の維持に関する問題

オンライン授業は、教員・学生ともに慣れていないため、否定的な意見も一部にみられる。

職業指導Ⅱでは、オンラインだからと授業の質を低下させないことや学生の学習状況を把握する必要があるため、どうしても課題が多くなる傾向が出てしまった。次年度に向けて検討が必要である。

この科目における学生からの授業評価でも課題が多いという声が見られた。しかし、きめ細かく手間をかけてコメントをすることを心掛け、コロナ禍においても履修者にしっかりと学習を行って欲しいとのメッセージを送り続けた。

学生にとって、コロナ禍においても学びを止めないことや新たなオンライン教育にチャレンジする教師の姿が何よりの指導になると言える。また、現在大学に在学する学生は、大学でオンライン授業を受け、高校でオンライン指導を行う最初の世代となるため、学生として色々なことを感じるとともに模擬授業を通じて、授業者の立場を経験する機会は大変重要である。

## 5.2 オンライン授業に対する技量向上

オンライン授業を行うには、以下に挙げるようないくつかのステップが必要となる。

- ①講義資料を作成するワープロ・プレゼンテーションソフトウェア等の操作習得
- ②ToyoNet-ACEのような学習システム（LMS）の操作習得
- ③Cisco Webex Meetingsのようなオンライン授業ツールの操作習得（リアルタイム授業や一人授業による録画作業）
- ④YouTube, Googleドライブなどのオンデマンド配信ツールの操作習得

オンライン授業について、黎明期の段階は授業者自身が行う必要があるものとサポートスタッフの配置でカバーできるものを分け、授業の遂行を最優先に行う必要がある。

これができる上で、次のような発展が考えられる。

- ⑤ブレイクアウト（少人数でのグループワーク）機能の活用
- ⑥オンラインファシリテーション技術の向上
- ⑦対面とオンラインを組み合わせたハイフレックス（Hybrid-Flexible）授業への対応

これからの時代を担う学生には、レポートの作成やオンライン授業の受講で、在学中に自然と身に付けられるものが多くみられる。

近年、GIGAスクール構想など、小・中学生からコンピュータやオンラインを活用した授業を受ける機会が増え、数年後にはオンライン授業自体が当たり前のものとなってくることが予想される。

そのため、教師は早い時期に色々な形式の授業にチャレンジをし、失敗を含めた経験を多く蓄積することが求められる。教職を目指す学生には、大学においてそのような機会を多く持たせていくことが望まれる。

## 5.3 オンライン授業に対する授業準備

私の場合、職業指導を他大で指導した経験から、講義

資料が一部、使用できたことが準備時間の短縮に大きく役立った。

デジタル資料の作成には、多くの時間が必要となるが、グラフや図などを少しずつ蓄積していくことや講義に必要な資料のサイトを把握しておくことも重要である。

学生に対して、どのようなデータをどのようなWebサイトで入手できるかといった指導を日頃からしておくことも必要である。

## 5.4 オンライン授業に関する情報収集

私は、春学期期間中に国立情報学研究所が主催するサイバーシンポジウムに参加したり、本学ではToyoNet-ACE内のオンライン授業の実践（カタリバ）を見ることが授業を行う上で大変参考になった。

学生に対してもこのようなオンライン授業自体に関する内容を学習する機会を設ける必要性が感じられる。

## 6. まとめ

2020年度は、新型コロナウイルス感染症に対する緊急事態ということで、多くの教員が無理を抱えながら進めてきた状況である。

個人として、今年度作成した資料や経験をもとに授業改善を行うほか、学内で経験や蓄積を共有すること、オンライン時代の教育について開拓していくことが必要である。

また、オンライン教育が普及していく時代であっても教師が子どもに与える影響が変わるわけではない。

生徒に寄り添うことや専門性が高く、大きく成長をさせられる教師が本学から多く輩出されることを期待して、今後も取り組んでいきたい。